

日本基督教団八代教会の変遷と 同教会堂の建築的特徴に関する研究

森山 学*, 松本 麻里**

A study on the change of 'United Church of Christ in Japan, Yatsushiro Church' and the architectural character of the church architecture

Manabu Moriyama*, Mari Matsumoto**

The church architecture of 'United Church of Christ in Japan, Yatsushiro Church' is a historic building in Yatsushiro where Christian culture is rich. But it is not yet evaluated. A purpose of this study is to evaluate this church architecture. This paper divides the history of the Yatsushiro Church into four, the days of "propagation", "the first", "the second" and "the third". And it clarifies the change and the architectural character in each time.

キーワード：日本基督教団，教会堂建築，八代

Keywords：United Church of Christ in Japan, church architecture, Yatsushiro

1. まえがき

熊本県八代市はキリスト教文化に縁のある土地である。キリシタン大名・小西行長の統治時代(1587(天正 15)～1600(慶長 5))には、天草と並ぶキリシタン多数の地として知られ、加藤清正時代(1600～11(慶長 16))には徳川幕府下、全国初のキリスト教徒の殉教があった。

2008 年に行われたこれら殉教者 11 名の列福式等を契機に、当地はキリスト教文化見直しの機運を高めつつある。だが昭和初期建設の「日本基督教団八代教会」教会堂は、なお議論されていないのが現状である。日本基督教団教会堂については長久清氏、川島洋一氏の先行研究がある。

本研究は文献調査、ヒアリング、実測調査等により(表 1)、「日本基督教団八代教会」とその教会堂の変遷、及び建築的な特徴を明らかにし、その評価を行うことを目的とする¹。

変遷の過程において当教会堂は三つの時期に分類できる。さらに教会堂が建設される以前の教会の活動時期を「布教時代」とし、本稿はこの四期ごとに論述している。

表 1 ヒアリング・実測調査

	実施日	ヒアリング対象者
第 1 回ヒアリング	2006.4.26	F 牧師
第 2 回ヒアリング	2006.7.10	F 牧師・信徒 T
第 3 回ヒアリング	2009.9.3	M 牧師・信徒 T
実測調査	2009.12.17	—

* 建築社会デザイン工学科
〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627
Dept. of Architecture and Civil Engineering,
2627 Hirayama, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan 866-8501

** フジブルーフ工専有限会社
〒861-4101 熊本県熊本市近見 8 丁目 8-83
Fuziproof LLC,
8-8-83 Tikami, Kumamoto-shi, Kumamoto, Japan 861-4101

また研究過程で第一期、第二期、第三期の教会堂の図面を CAD で復元し、第一期、第二期では三次元化することで、各期の建築的特徴をより明確に把握できるようにした。

2. 八代のキリスト教の歴史

2.1 近代以前

「日本基督教団八代教会」を論じる前に、その価値を評価する上でも、八代のキリスト教文化の足跡を整理する。

16 世紀終わり頃の熊本は、加藤清正が北肥後を支配し、小西行長が南肥後を支配していた。加藤は日蓮宗、小西はキリスト教信者である。当時の八代には 25,000 人もの信者がおり 14 の教会が建てられたとの記録が残っている²。

南肥後は小西が関が原の戦い(1600)で敗れたのち、加藤の領地となり、加藤はキリスト教徒を迫害し始めた。その結果、1603 年に 6 名のキリスト教徒が殉教した。これが、徳川幕府時代の最初の殉教であった。さらにその後、1606 年に 1 名、1609 年にも 4 名が殉教した³。当時の遺構としては、当時のものと推定される金立院のキリシタン墓碑等ごくわずかにしか残されていない。

加藤家改易後、細川三斎(忠興)が八代に入城する(1632(寛永 9)～45(正保 2))。三斎の妻・ガラシャ(玉)がキリスト教徒であったことから、本来細川家ではキリスト教に寛容だったが、やがて幕府のキリスト教禁止の方針に従うようになる⁴。八代には三斎とガラシャの息女でキリスト教徒であった長姫を弔う安昌院が盛光寺に置かれている。

2.2 八代カトリック教会とシャルトル聖パウロ修道院

1873(明治 6)年、「キリシタン禁教令」が解かれてから、熊本初のカトリック宣教師、ジャン・マリー・コール神父

(1850-1911)が1889(明治22)年に来熊する。コール神父は殉教者を出した由緒ある地域である八代に1890(明治23)年、「八代カトリック教会」を創設する。ちなみにこの教会の敷地内には、1990(平成2)年に前述の殉教者たちの石碑が建てられ、毎年12月に殉教祭がおこなわれている。

さらにコール神父は、八代地域に再び伝道することを考え「シャルトル聖パウロ修道女会」に相談する。その結果、1900(明治33)年に同修道会から修道女3名が八代に派遣される⁵。当初は空き家を借り病人や孤児の救護にあっていたが、同年12月には早くも修道院の建物が竣工している。

建物は木造二階建て、小屋組はキングポストトラス、屋根が寄棟造、瓦葺きのベランダ下見板コロニアル様式である。この建物は現存し、2000年12月4日に国登録有形文化財に登録されている⁶。また同修道院煉瓦塀は1919(大正8)年当時のもので、2009年の取壊し後、一部のみ残存する。

2.3 八代南部高等小学校事件

「八代南部高等小学校事件」(1892(明治25))は、キリスト教家庭に育った蓑田元卓という生徒が、天皇の「聖影」安置所において部屋に入ってきた雀を捕獲しようとして扇子を投げ上げたことに対し、当該生徒が聖影を打ち落とそうとしたとして作為的に騒がれ、問題化されたものである。

この事件は当時熊本県内で起きた同様の2つの事件とともに、全国的にキリスト教を攻撃する当時の風潮を生み出した事件として、キリスト教にとって重要な事件である⁷。

2.4 現在の八代におけるキリスト教文化の継承

八代での殉教は、日本から送られた書簡によりイエズス会や教皇に詳細に伝えられ⁸、ヨーロッパにおける八代への関心は『十六世紀初頭イエズス会書簡集』の出版(1611, 12)⁹等によって高まる。当時ヨーロッパで制作された小西行長を主題とする音楽劇¹⁰が2003年に、八代の殉教者を主題とする歌劇¹¹が2007年に市内で市民オペラとして再演された。

八代市立博物館では2002年に「天草・島原の乱」展、2007年に「小西行長」展が開催されている。

1609年の殉教の場となった公園には以前より、その解説をする標木が八代史談会によって立てられていたが、近年その近くに記念碑が立てられた。

3. 日本基督教団八代教会の布教時代

3.1 活動の状況

1886(明治29)年以前、「日本基督教団八代教会」の前身となるプロテスタント系の会派が市内を転々として布教活動を行っている。八代市長町(現・本町一丁目)のスーパー「マルショク」付近や現在の「長崎銀行八代支店」の地等、合計8回移転している¹²。その後1886年5月にアメリカ南部出身のデーヴィンソン宣教師を中心に八代教会を設立した¹³。この時、八代市長町の荒木氏宅に講義所を設置し、鹿児島出身の市来敬太郎が初代牧師として迎えられた¹⁴。

また1907(明治40)年には幼稚園事業を開始している¹⁵。これが現在の「聖愛幼稚園」の前身となる。

この同年、「日本メソヂスト教会」が誕生しており¹⁶、八

代教会もこの頃「日本メソヂスト教会八代教会」になったと考えられる。

1923(大正12)年には、現在地の石原町(現・八代市袋町5-1)へ移転する。当時の敷地は488坪、7320円だった¹⁷。教会堂が建てられる以前は「旧家屋」(建設年不明)を礼拝堂兼園舎として活用していた¹⁸。この「旧家屋」は後述の図面(図4)で分かるように、現在の教会堂の南に隣接している。

3.2 宣教師の推定

ヒアリングより判明した宣教師デーヴィンソンについてはファーストネームが明らかではない。しかし文献11には、当時九州でメソヂスト宣教師として布教活動をしていた人物としてジョン・C・デーヴィンソン(1843-1928)の名が記されている¹⁹。文献11によれば、彼はメソヂスト監督教会日本派遣の最初の開拓バンドの一員として来日し、九州にメソヂスト宣教活動を始めた。1902(明治35)年から1909(明治42)年には熊本の長老司も務めている。おそらく八代教会を創立した人物は、ファミリーネームの一致と当時の状況からジョン・C・デーヴィンソンであると推定できる。

3.3 当初の講義所の推定

第3回のヒアリングの結果、八代教会創立当初の講義所は八代市長町の荒木氏宅を借りたものであり、現在も荒木氏が同じ敷地に住んでいるということが分かった。また第2回のヒアリングでは、教会創立以前の転々と移転した布教活動拠点の一つとして、長町のスーパー「サンリブ(現・マルショク)」付近というのがあった。

このことから八代市本町一丁目(旧・長町)の「マルショク」付近の荒木氏宅を文献15で調べた結果、該当する宅地を発見した。これが図1の■印の箇所であり、高い確率で八代教会創立当初の講義所の地と推定できる。

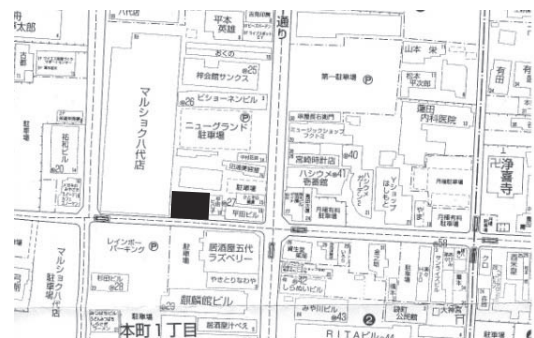


図1 八代教会創立当初の講義所の位置(推定)

4. 第一期教会堂時代

4.1 教会堂の概要

初代教会堂が1927(昭和2)年、前述の敷地内の「旧家屋」の隣に建設された。この建物は1933(昭和8)年に焼失する²⁰。この初代教会堂の時代を「第一期教会堂時代」とする。

写真1は焼失時の写真であり、現存する唯一の全体像が分かる写真である。左側に「旧家屋」と思われる建物が写っていることから、この写真の右側の正面入口は敷地北側であることが分かる。また写真2は1931(昭和6)年6月14



写真1 焼失時の初代教会堂（1933）（出典：文献13）



写真2 1931年6月14日の集合写真（出典：文献13）

日に教会堂前で撮影された集合写真である。この写真から主要な外壁仕上げが分かる。

また当時の図面が教会に一部残されている。設計図書名は「聖愛幼稚園新築設計図」であり、「昭和二年五月二十七日」の日付がある。図面は平面図、立面図、かなばかり図、立面詳細図等で寸法単位は尺である。柱は4寸角である。室名には「講堂」、「教壇」、「教室」とある。図2はこの図面をCADで作成し直したものである。

以上の資料から初代教会堂は木造二階建て、屋根は瓦葺、外壁は主に南京下見板張とモルタル塗、一階床面積約152.3㎡、二階約28.6㎡で延床面積約181㎡であることが分かる。収容人数は一階平面図の長椅子一つに4人座る場合、推定で108人は収容可能である。設計・施工者は不詳である。

図面から分かるように、教室上部に床の間を備えた10畳の和室があるのが特徴的である。図面から判断する限り礼拝室（講堂）吹抜に面したギャラリーとしては意図されていないようである。写真1ではこの二階和室の焼失が激しいが、棟木らしき部材の存在が確認できる。

4.2 教会堂の建築的特徴

設計図書名、室名表記から、園舎としての活用を重視し



図2 第一期教会堂時代 平面図・立面図・3Dモデリング

ていたと考えられる。

二階に和室がある二階棟が、長方形平面の切妻屋根である礼拝室（講堂）棟に直交して接続され、しかも礼拝室（講堂）棟よりも棟高が高い。正面入口や野外便所の付属屋とともにこの二階棟が教会堂全体を複雑にし、象徴的で主たる要素となるべき礼拝室（講堂）棟を外観上、判別しづらくしている。図面を三次元化することで（図2）、この特徴がより把握しやすくなった。

ただし開口部のデザインでは礼拝室（講堂）は半円アーチ、その他は矩形として差別化している。

内部空間については、図面から判断する限り、聖壇（教壇）となるアプスの前面に、「天国の門」として半円アーチを備えていたことが分かる。会衆席の長椅子の配置は、バシリカ式教会堂のように救済へ至る長い道のりを表現するべく中心軸を強調するものではなく、またプロテスタント教会堂のように堂内の一体感を演出する配置でもない。

以上の点から初代教会堂は、園舎としての機能、必要諸室を満たすことが優先され、いまだ教会堂の質の追求へ至っていない素朴な建築物であったと言える。

5. 第二期教会堂時代

5.1 教会堂の概要

初代教会堂の焼失後、その同年6月に早くも教会堂が再建されている。献堂式の写真（写真3）には1933年6月11日の日付がある。また第2回ヒアリングより竣工は6月25日ということである。この再建教会堂が1956（昭和31）年に大改修を受けるまでを「第二期教会堂時代」とする。

この時期、1940（昭和15）年に施行された「宗教団体法」により、日本国内のプロテスタント会派である「日本基督教会」、「日本メソヂスト教会」等35教派が翌年、合同して「日本基督教団」を成立する。これにより「日本メソヂスト教会八代教会」も「日本基督教団八代教会」に変更される。1945（昭和20）年に「宗教団体法」が廃止されるとともに「宗教法人令」が施行された。これにより「日本基督教会」など「日本基督教団」から脱退する教派が出たものの「日本メソヂスト教会」は「日本基督教団」にとどまった²¹。教会から提供いただいた写真4,5は、おそらく竣工写真である。写真4の右手に北側前面道路が見える。

第二期についても「昭和八年五月」と日付のある図面が教会に一部残されている。設計図書名は「日本メソヂスト八代教会堂新築設計図」、「聖愛幼稚園設計図面」、「日本メ



写真3 献堂式（1933.6.11）（出典：文献13）

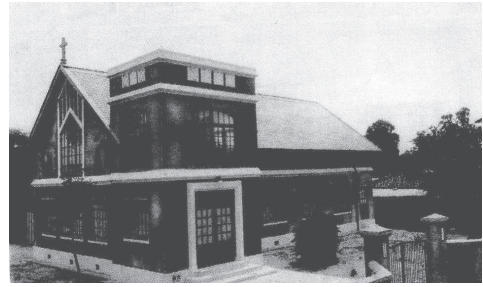


写真4 第二教会堂時代 竣工（想定）外観（1933）
（出典：文献13）

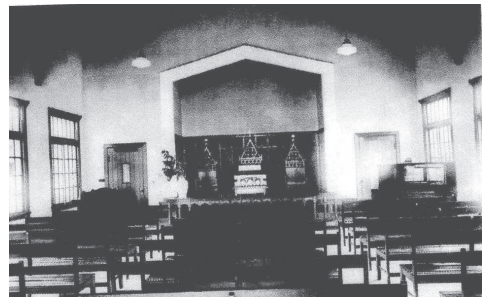


写真5 第二教会堂時代 竣工（想定）内観（1933）
（出典：文献13）

ソヂスト八代聖愛幼稚園新築設計図」と様々である。図面には平面図、立面図、断面図、立面詳細図、腰羽目板の現寸図等が含まれる。寸法単位は尺である。柱は4寸角である。室名表記は第一期同様、園舎としての使用が重視され「遊戯室」、「教壇」、「教室」と記されている。図3はこの図面をCADで作図し直し、さらに3D化したものである。

これら資料とヒアリングから建築概要を以下のようにまとめることができる。立地は初代教会堂と同じ位置で、南側の「旧家屋」に隣接している。つまり「旧家屋」は焼失を免れたことが分かる。木造二階建て、小屋組は木造トラスのサイソート小屋組（図3 断面図）、外壁は塗装仕上げ、屋根は8寸勾配でスレート葺き等の平滑な仕上げである。

一階床面積は約165.4㎡、二階は約41.7㎡で延床面積約207㎡、収容人数は写真5より、長椅子一つに4人座とした場合、推定で72人収容可能である。ただし二階は礼拝室（遊戯室）吹抜に面したギャラリーであり、このギャラリーを含めればさらに多くの収容が可能である。

建設費は5100円、門塀等工作費354円、諸経費400円、備品600円だった²²。設計者は不詳だが、施工者は第1回ヒアリングから辻組であることが分かっている。

全体は長堂形式で切妻屋根の礼拝室（遊戯室）に塔が付属するより単純な構成で、塔の基部、北向きに玄関がつく。外壁の軒蛇腹、胴蛇腹、扉枠に簡素な線型を備えている。内部は天井がなく木造トラスとそれを支える持ち送りによる力学的表現が強い印象を与えている²³。

5.2 施工者の辻組について

辻組はインターネットで調査したところ1894（明治27）年10月に創業しており、1990（平成2）年に九州建設株式会社

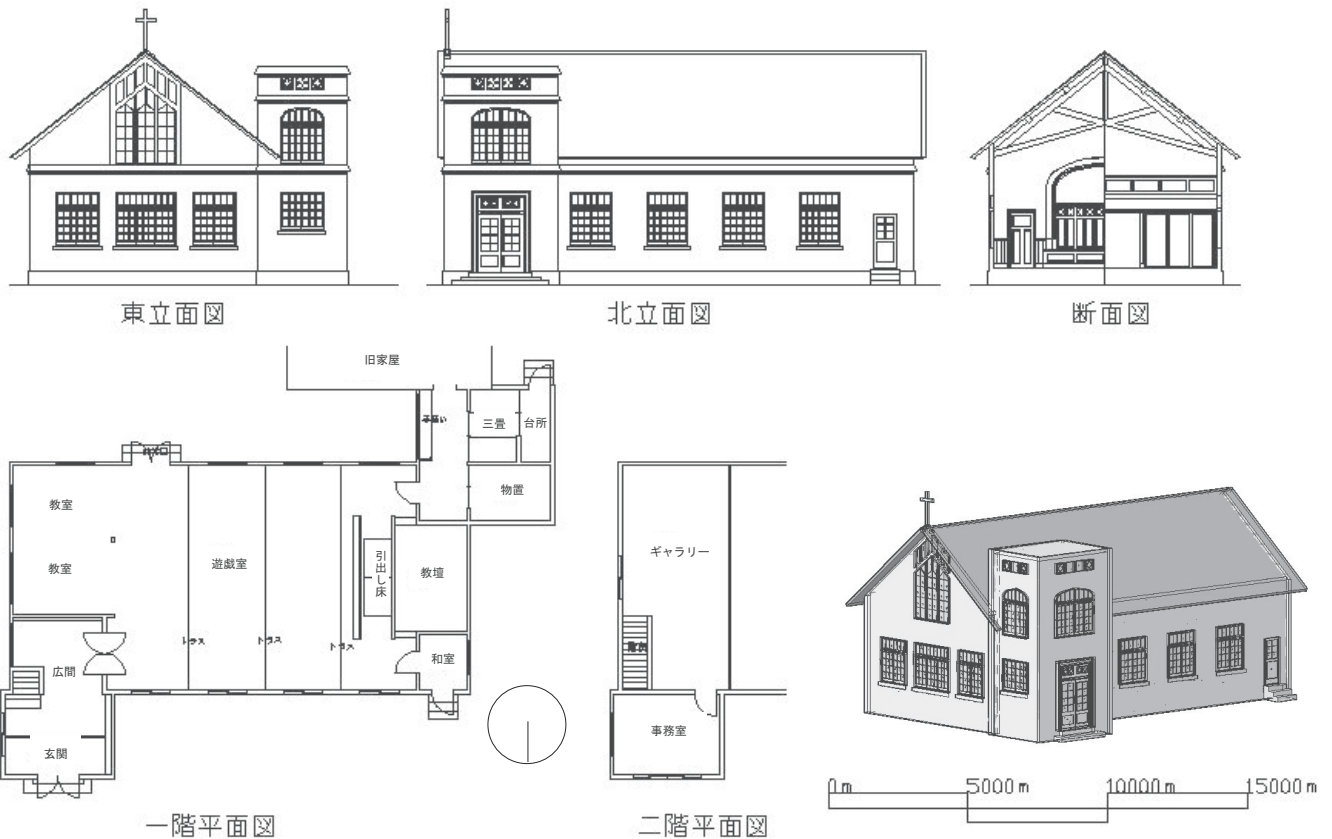


図3 第二期教会堂時代 平面図・立面図・断面図・3D モデリング

に社名を変更し、現在まで営業をしている。

創業から1950年まで18件のキリスト教関連の建物を施工している²⁴。その内、国登録有形文化財に登録された建物は5件ある。1925(大正14)年竣工の「九州学院高等学校ブラウン記念講堂」(W.M.ヴォーリズ設計)、翌年竣工の「九州女学院高等学校本館」(現・九州ルーテル学院)(J.H.ヴォーゲル設計)、1929(昭和4)年竣工の「日本基督教団本郷中央教会」(川崎忍, J.H.ヴォーゲル設計)、同年の「神水幼稚園園舎」(S.Kawasaki&Ed.Hussey, Jr Architects 設計)、1938(昭和13)年竣工の「日本福音ルーテル小城教会」(ヴォーリズ建築事務所設計)である。後者は、竣工年、規模、形状ともに八代教会に類似し、同じ小屋組をもつ事例である。

九州建設株式会社に問合せしたところ、福岡大空襲(1945(昭和20).6.19)で事務所が焼失し、八代教会に関する資料は残っていないとの回答をいただいている。

5.3 教会堂の建築的特徴

「日本基督教団」の教会堂について、その造形を統計的に調査し、また事例研究も行っている川島洋一氏の研究(文献8-10)をもとに、「日本基督教団」の教会堂の外観の特徴を以下に要約することができる。①切妻屋根が圧倒的に多く、特に妻側をファサードとする切妻妻入が多い。②塔を強調し、塔がある場合は主屋を低く、塔がない場合は主屋を高くし塔のイメージを演出する。ただし塔の有無は教会の経済力に左右される。③ファサードの壁面は非対称なものが多い。④妻側ファサードの場合は塔を中央に配置する傾向

が高く、平側ファサードの場合は塔のない事例の方が多い。

第二期教会堂時代の八代教会の教会堂は、第一期と比較して教会堂として把握しやすい単純な構成になっている。

その構成は切妻の長堂形式に塔を備えるものであり、これは川島氏の研究に基づけば、「日本基督教団」の教会堂として典型的、理想的な造形であると言える。ただし平側に主要前面道路が面し、玄関も平側にある。この点は敷地条件からの判断と考えられる。この判断により前面道路に門が開けられ、直進のアプローチ空間を経て玄関へ至る単純なアプローチ計画を実現している。

この塔は鐘塔、階段塔等ではなく、一階に玄関、二階に事務室が設けられているのみであり、塔としての外観こそが重要な目的である。

そもそも過度な装飾や偶像を破棄するプロテスタント教会堂は、例えばイギリスの清教徒運動のような非記念碑的建築物の場合もあったが、ヨーロッパ都市部やアメリカではカトリック教会堂と同様の教会らしい性格を公的に表明する外観を備えていた²⁵。特に19世紀後半のゴシック・リバイバルの時代、塔に代表されるゴシック様式はプロテスタント教会堂に広く流布し、長期にわたる影響を与えた²⁶。

八代教会の再建教会堂もまさに「教会らしさ」を物語るための外観デザインであると言えよう。棟上の木製十字架も同様の役割を担うものである。長久清氏は、日本の教会堂は塔が多く実用性のない場合でも建設される、その塔上か屋根上に十字架を掲げる事例も圧倒的に多いと述べてい

る²⁷が、まさにそのまま合致する。

内部空間に関しては初代教会堂と同様、図面の室名表記から、園舎としての活用を重視していることが推測される。これをより表しているのは、聖壇(教壇)の立ち上がり前面から引き出されるスライド式聖餐台である。聖壇が二段で構成され上段に説教卓、下段に聖餐テーブルを置く事例があるようだが²⁸、この場合、下段が収納できる点が特徴である。これは礼拝室を遊戯室として使用する場合に収納して使うためであり²⁹、園舎としての活用を重視していることが伺える。これは聖餐式を説教ほどに重視しないプロテスタントだからこそ可能だったとも言えよう。

カトリック教会では会衆は遠くから聖職者のミサを眺める傍観者でしかない、と捉えたプロテスタント教会は、会衆が神の言葉に出会う説教をより重視するようになり、会衆が全員説教に集中でき、聖職者と会衆が一体となるような教会堂がプロテスタント教会堂の特徴となる³⁰。その典型が16世紀半ば以降の「内陣四角形」タイプ³¹である。

同様の目的で規模を大きくしないこと、小さな規模の堂内に多くの信徒を収容するべくギャラリーを二階に設けることも、プロテスタント教会堂の特徴となった³²。特に日本では敷地の狭さを二階建てで補う傾向がある³³。八代教会の再建教会堂にも二階ギャラリーが設けられている。

しかし前述のスライド式聖餐台の前に「恵の座」が設けられ、この点では堂内を内・外陣に分離し一体感を損なっている。「恵の座」は柵であると同時に内陣の前にひざまずいて祈るための場、配餐を受ける場であるが、他のプロテスタント教派には見られないメソジスト系の伝統的特徴であり、カトリック教会堂の内陣を仕切る柵に由来する³⁴。ただし八代教会では聖餐台自体が可動式なので、「恵の座」もその都度、舗設したと考えられる。

平面図そのものでは、長堂形式で奥に聖壇(教壇)があり、会衆席の長椅子を左右に配置し中心軸を強調する配置をとっており、先のゴシック・リバイバルを経た「講堂」タイプ³⁵の平面形式と言える。救済へ至る長い道のりの演出とともに、説教を講義のように聞きやすくするために考案された形式で、19世紀、「内陣四角形」タイプに取って代わった形式である。ちなみに「講堂」タイプの教会堂で堂内の一体感を演出するため、左右の長椅子を中央向きに角度をつけて配置する事例³⁶があるようだが、八代教会では、現在でもそこまでの処置を行っていない。

聖壇(教壇)前の「天国の門」は図3断面図ではくし形アーチとして描かれていたが、実際は写真5から分かるように切妻形のアーチとして実現している。この形状は東面のギャラリーに開けられた窓の形状に対応しており、デザイン的な一貫性に基づく判断であったと推測できる。

以上の点から再建教会堂は、素朴な初代教会堂とは異なり、園舎としての機能を重視しつつも、プロテスタント教会、メソジスト系の教会堂としての特徴を備え、結果とし

て日本基督教団教会堂の典型となっている。詳細には①外観の「教会らしさ」の演出、②堂内の一体感の演出、③聖餐式の軽視と説教の重視、④「恵の座」の設置である。

6. 第三期教会堂時代

6.1 教会堂の概要

第二期教会堂時代の再建教会堂は、その後市道である前面道路の拡幅工事により、塔の減築という大改修を経て現在に至っていることが、第1,3回のヒアリングより分かった。そこで道路の拡幅工事について八代市役所に問い合わせたところ、八代教会の敷地(八代市袋町5-1)の一部が1956(昭和31)年2月に分筆され市の所有になっていることが、市の財産台帳より判明した。このことから拡幅工事は、つまりは塔の減築は1956年だったことが分かる。この1956年から現在に至るまでを「第三期教会堂時代」とする。

この改修による大きな変更点は門の撤去、塔の減築、塔のあった位置に切妻の付属屋を接続し、平面の約半分ずつを玄関とポーチに充てたことである。アプローチ空間はなくなり道路から直接ポーチへ連結された。現在の教会堂(写真6)の形状は、これによりほぼ完成されたと言える。

図4は第二期教会堂時代の図面をもとに、実測調査した(2009.12.17)結果を反映して描いた現状図面である。実測対象は、改修された玄関部分、「旧家屋」接続部分、開口部、増築された便所、図面と現状が異なる聖壇部分である。

6.2 その後の改修

1956年以降も修繕などの改修が行われ、現状に至る。まず昭和30年頃、園舎を「旧家屋」南側に増築する³⁷。教会堂自体については、玄関部分の西側に便所を増築しているが、この増築年は不明である。

1989(平成元)年に老朽化を理由に屋根を修繕し、東面の透明ガラスをステンドグラス(写真7)に変更している³⁸。この改修時におそらくスレート葺きだったと思われる屋根仕上げがS形瓦葺きに変更されたと考えられる。ステンドグラスについては、メソジスト系では従来ステンドグラスをあまり使用しなかった³⁹ことから、老朽化のような消極的ではなく、明瞭な意図をもった改修だったと言えよう。

同時期に礼拝室(遊戯室)の開口部も改修されている⁴⁰。本来矩形だったがアルミサッシの半円アーチ形の窓に改修され、第一期教会堂時代を彷彿とさせる。

かつて棟上にあった十字架が、台風で飛んでしまったた



写真6 現状(2009撮影) 左:外観, 右:内観

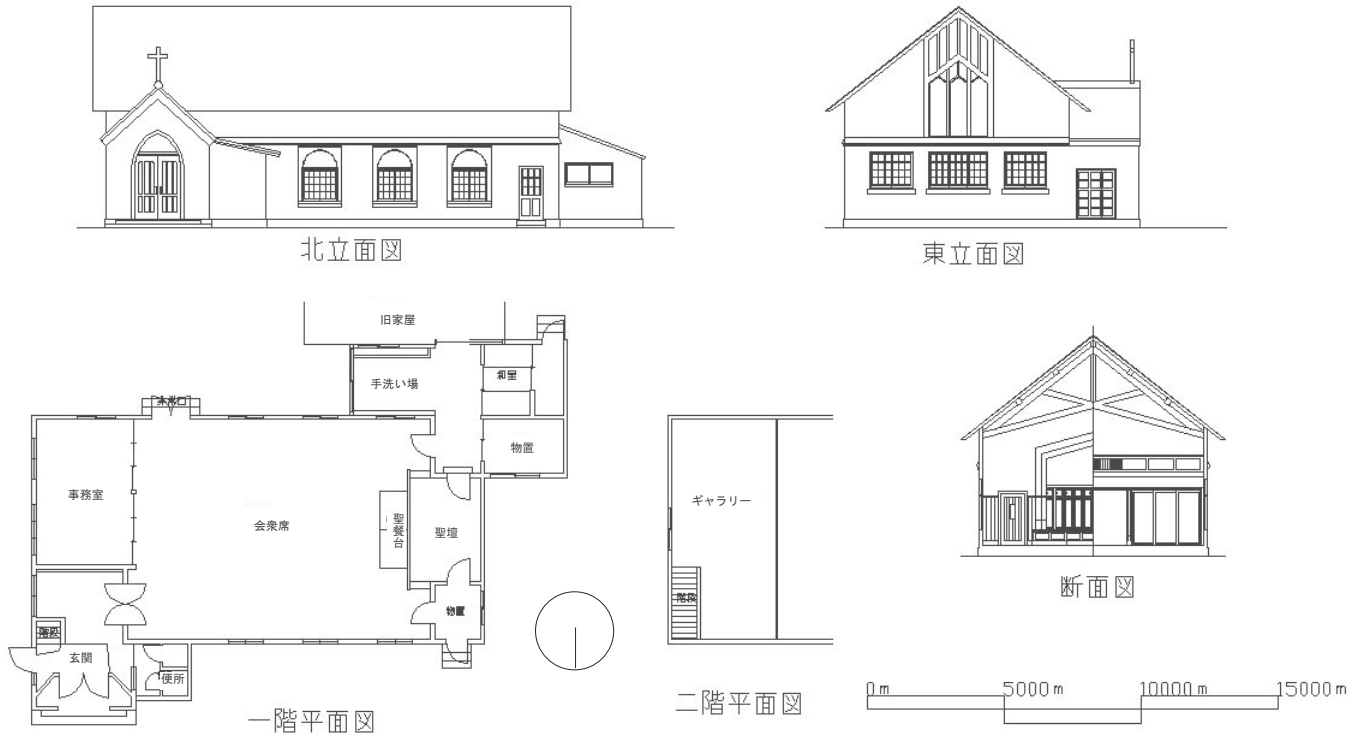


図4 第三期教会堂時代 平面図・立面図・断面図

め、その後、玄関部分の屋根の棟上に位置を変えて十字架を設置している⁴¹。十字架自体も木製から金属製に改めている。現在のM牧師はこの変更について道路から見えるようにしたものと考えられると述べている⁴²。

その他礼拝室の内壁全体に腰板を張っている点も、内観の印象を変えている。また外壁の色はその時々牧師の判断で塗り替えられてきたようである⁴³。

さらに「恵の座」が「邪魔だったので」⁴⁴撤去され二階ギャラリーに収納された(写真8)。これにより内・外陣の境界がなくなり、プロテスタント教会の掲げる堂内の一体感をより実現したと言える。「恵の座」が置かれた二階ギャラリーは現在物置になっている。これは礼拝参加者の減少に関係している。かつては100名以上の参加がありギャラリーも使用していた⁴⁵が、「日本基督教団」に提出した「2007年度報告書」⁴⁶によると2007年度の八代教会の日曜朝拝者数は26人となっている。プロテスタント教会堂の特徴であるギャラリーが礼拝参加者の減少により無用化する同様の傾向は、現在のヨーロッパでも見られるとの報告もある⁴⁷。

6.3 教会堂の建築的特徴

塔の減築は外的要因に基づくものであった。第二期教会堂時代の「教会らしさ」はこれによって失われた。



写真7
東面ステンドグラス
(2006撮影)
左：外観，右：内観

「教会らしさ」の喪失の代わりに近年の十字架の移設、半円アーチ窓への改修によって、「教会らしさ」を代償したと言えよう。玄関部分の開口形状に採用された当教会堂唯一の尖頭アーチも、塔が表現していた垂直性を代わって表現するべく選択されたと解釈できる。垂直性とはゴシック教会堂に用いられた天上への祈りを塔や尖頭アーチによって体現させた造形概念であり、よく「教会らしさ」を示す要素である。またメソジスト系では本来使われなかったステンドグラスへの変更も、会派の慣習よりも大衆にとっての分かりやすさを優先した判断と言えよう。

その他母屋、垂木、破風板の簡素な線型やサイソート小屋組等、第二期教会堂時代の意匠は、現在も残る。

7. まとめ

「日本基督教団八代教会」教会堂を教会堂建設以前の布教時代、初代教会堂の第一期、再建教会堂の第二期、大改修を経た第三期、に区分することができた。

布教時代では教会創設時の講義所の位置と宣教師を推定した。これは「八代カトリック教会」、「シャルトル聖パウロ修道院」の活動、「八代南部高等学校事件」といった八代での他のキリスト教関連の出来事と同時代であった。

第一期教会堂時代以降は現存する図面と実測調査によって各時代の図面をデジタル化した。これによって教会堂の建築的特徴の変遷を明確にした。

第一期教会堂時代は園舎としての活用などの必要性を優先し、教会堂建築としては洗練されていなかった。

第二期教会堂時代は園舎としての活用を重視しつつも、プロテスタント教会、メソジスト系、「日本基督教団」の教会堂としての特徴を持ち「教会らしさ」が表現されていた。



写真8 聖餐台（2009撮影）と「恵の座」（2006撮影）
左：スライド式聖餐台 右：ギャラリーにある「恵の座」

当時の八代のまちなみにキリスト教の風景を現出させその文化を根付かせる役割を担ったに違いない。

第三期教会堂時代では塔の減築により「教会らしさ」が失われるものの、それを代償する改修が行われてきた。現代の建材の使用によって歴史性が薄らいでいるようでもあるが、第二期教会堂時代以来の意匠もよく残されている。

「日本基督教団」の教会堂の国登録文化財は全国で23件ある⁴⁸。八代教会もキリスト教文化豊かな八代の地に長年キリスト教文化を浸透させてきた由緒ある教会堂として、同様の価値を見出せよう。

参考文献

- (1) 長久清：「礼拝と礼拝堂」，日本基督教団出版局(1970)。
- (2) 長久清：「教会と教会堂」，日本基督教団出版局(1988)。
- (3) 高橋保行他5名：「教会建築」，日本基督教団出版局(1985)。
- (4) B.Reymond: "L'architecture religieuse des protestants, Labor et Fides, Genève(1996)(黒岩俊介訳：「プロテスタントの宗教建築」，教文館(2003))。
- (5) 八木谷涼子：「日本の教会をたずねて」，平凡社(2002)。
- (6) 八木谷涼子：「日本の教会をたずねてⅡ」，平凡社(2004)。
- (7) 田淵論：「教会堂建築 構想から献堂まで」，新教出版社(2006)。
- (8) 川島洋一：「教会建築の形態論的研究その1」，日本建築学会大会学術講演梗概集(1976)。
- (9) 川島洋一：「教会建築の形態論的研究その2」，日本建築学会大会学術講演梗概集(1977)。
- (10) 川島洋一：「教会建築の形態論的研究その3」，日本建築学会大会学術講演梗概集(1978)。
- (11) J.W.Krummel：A biographical dictionary of Methodist missionaries to Japan 1873-1993 (「来日メソジスト宣教師事典 1873-1993年」，教文館(1996))。
- (12) 日本基督教団事務局：「日本基督教団年鑑 2009」，日本基督教団出版局(2008)。
- (13) 日本基督教団八代教会：「教会の思い出 日本基督教団八代教会 120周年記念冊子」，日本基督教団八代教会。
- (14) 文化庁文化財部：「総覧登録文化財建造物 5000」，海路書院(2005)。
- (15) 「ゼンリン住宅地図熊本県八代市八代①[旧八代]」，ゼンリン(2008)。
- (16) 松本寿三男他3名：「熊本県の歴史」，山川出版社(1999)。
- (17) 新熊本市史編纂委員会：「新熊本市史 通史編 第五巻 近代Ⅰ」，熊本市(2001)。
- (18) 日本カトリック司教協議会列聖列福特別委員会：「ペトロ岐部と一八七殉教者」，カトリック中央協会(2007)。
- (19) 結城了悟：「八代の殉教者」，日本二十六聖人記念館(1985)。
- (20) 八代市立博物館未来の森ミュージアム：「小西行長」，八代市立博物館未来の森ミュージアム(2007)。
- (21) 八代市立博物館未来の森ミュージアム：「天草・島原の乱」，八代市立博物館未来の森ミュージアム(2002)。
- (22) カトリック福岡教区：「福岡教区 50年の歩み」，カトリック福岡教区(1978)。

- (23) 熊本県教育委員会：「熊本県の近代化遺産」，熊本県教育委員会(1999)。

注

- ¹ 本稿ではこれまでの研究(松本：日本基督教団八代教会の来歴，熊本高専課題研究(2010)／森山・松本：日本基督教団八代教会の来歴と特徴について，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-2，pp.525-526(2010))を加筆・修正の上集成し，より明確に建築的に評価づける結論を導いた。
- ² 文献20，pp.118-119。
- ³ 殉教の年，人数，当時の様子は文献18～20等参照。
- ⁴ 文献21，p.157。
- ⁵ 熊本・八代の当時の宣教状況は文献22，pp.28-29等参照。
- ⁶ 修道院の建築概要は文献23，p.172参照。
- ⁷ 当事件は文献16，17，23参照。他二つの事件は熊本英学校(1892(明治25))と山鹿高等学校(1892(明治25))。
- ⁸ 文献19，pp.15-16。
- ⁹ 『十六世紀初頭イエズス会書簡集』は1611年にローマ，1612年にマインツ，ドウエで出版(文献20，p.103)。
- ¹⁰ AGOSTINO TZVNICAMINDONO. 初演はジェノバ(1607)。八代での再演は改訂版のザルツブルグ(1756)公演版。
- ¹¹ AGNESE MARTIRE DEL GIAPPONE. TRAGEDIA, Parma, 1783。
- ¹² 第1,2回ヒアリング。
- ¹³ 第2回ヒアリング。
- ¹⁴ 第3回ヒアリング。
- ¹⁵ 第2回ヒアリング。
- ¹⁶ 文献5，p.136。
- ¹⁷ 現在地への移転の経緯は第3回ヒアリング。
- ¹⁸ 第1,3回ヒアリング。
- ¹⁹ 文献11，p.64。
- ²⁰ 第1,3回ヒアリング。
- ²¹ 文献5，pp.136-140。
- ²² 第3回ヒアリング。
- ²³ 図3断面図にトラス，写真5に持ち送りが見られ，これらは現状でも変更なく継承されている(写真6)。
- ²⁴ 九州建設株式会社工務本部からの返答(2010.2.28)及び同社のホームページ <http://www.q-shu.co.jp/> をはじめとするインターネット調査に基づく。
- ²⁵ 文献4，pp.59-66。
- ²⁶ 前掲書，pp.134-143。
- ²⁷ 文献2，pp.107-108。
- ²⁸ 前掲書，p.66。
- ²⁹ 第3回ヒアリング。
- ³⁰ 文献2,4参照。
- ³¹ 文献4，pp.168-173。
- ³² 前掲書，pp.94-98。
- ³³ 文献1，p.171。
- ³⁴ 文献2，p.64，pp.71-72。
- ³⁵ 文献4，pp.173-178。
- ³⁶ 文献2，p.121。
- ³⁷ 第3回ヒアリング。
- ³⁸ 第2回ヒアリング。
- ³⁹ 第3回ヒアリング。
- ⁴⁰ 第1回ヒアリング。
- ⁴¹ 第1回ヒアリング。
- ⁴² 第3回ヒアリング。
- ⁴³ 第2回ヒアリング。
- ⁴⁴ 第2回ヒアリング。
- ⁴⁵ 第2回ヒアリング。
- ⁴⁶ 文献12，p.330。
- ⁴⁷ 文献4，p.98。
- ⁴⁸ 文献14及び <http://bunka.nii.ac.jp/Index.do> による。